The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

智顗における不思議について

柏倉明裕

序　はたして不思議を説くとか、不思議を理解するとはどういうことか。我々は、悟りの境地を思議することができないが、思議できないことをどう理解すべきか。そのことについて智顗はどのように説いているのかを、天台三大部に基づいて考察する。

一　先ず初めに、「不可思議。無相而相。観智宛然。他解須弥容芥。芥容須弥。火出蓮華。人能渡海。就希有事解不思議。今解無心無念無能行無能到。」（大正四六、五一、下）とあるように、他解は須弥を芥に容れたりする稀有なることを不思議とするが、智顗は「無心無念無能行無能到」を不可思議とする。そのことは「端坐正念。蠲除悪覚捨諸乱想。莫雑思惟不取相貌。但専繫縁法界一念法界。繫縁是止。一念是観。信一切法皆是仏法。無前無後無復際畔。無知者無説者。若無知無説則非有非無。非知者非不知者。離此二辺住無所住。如諸仏住安處寂滅法界。聞此深法勿生驚怖。此法界亦名菩提。亦名不可思議境界。亦名般若。亦名不生不滅。」（同、一一、中）の「無知者無説者」を不可思議境界と名づくということに通ずる。しかも、その不可思議なる境界は「莫雑思惟不取相貌」「無前無後無復際畔」「住無所住」と表現され、菩提、般若、不生不滅と同じとされる。また、不可思議は「縦亦不可。横亦不可。祇心是一切法。一切法是心故。非縦非横非一非異。玄妙深絶。非識所識。非言所言。所以称為不可思議境意在於此云云。」（同、五四、上）と説かれ、「非縦非横非一非異」「玄妙深絶。非識所識。非言所言。」に不可思議境の意があるとする。また、「言語道断心行處滅。故名不可思議境。」（同、五四、中）「離言説妄想者。不可思議也」（同、六一、中）「不可思議名不決定」（大正三四、四三、下）とあるように、言語、心行、言説、妄想、決定がないことが、不可思議なのである。このように不思議、不可思議とは、思議のないこと、思議によって理解することができないことである。

二　さらに、智顗は、「失即思議。得即不思議也。」（大正四六、二九、上）と判ずる。失が思議である理由は、「此四解

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

皆有過。所以者何。有四取則有依倚。依倚則是非。是非則愛恚。愛恚生一切煩悩。」（同、上）と、思議としての自他共離の四解は過失があるからで、その理由は四取が有るのは依倚が有るからであり、この依倚によって是非し、是非することが愛恚となり、愛恚は一切煩悩を生ずることになるとする。依倚が有るとは、能としての立場に立つことであり、それが己の立場に執することになり、それが「執此還成性過。墮可思議中也。」（同、中）となる。不思議が「無思無念故無依倚戯論結業」（同、中）であり、思議は「能観所観」（同、五二、中）「観此法能度所度」（同、下）と思議境に説かれているように、「能」と「所」があるのが思議の特徴であり、能は我となり「謂我行我解讃我毀我。」（同、一三八、中）となる。さらに、智顗において思議は「在異心中是生滅思議。」（同、一二七、上）「次第生一切法。是名思議境也。」（同、一〇三、中）「如是浅深歴別。皆是思議境也。」（同、一一六、中）等と説かれ、結局のところ、智顗は蔵通別の前三教を思議に相当させ、円教無作を不思議とする。「前三浅近曲。後一深遠直云云。前三是小中大。後一是大中大。上中上。円中円。満中満。実中実。真中真。了義中了義。玄中玄。妙中妙。不可思議中不可思議。」（同、九、下）とあるように、「前三は浅近曲、後一は深遠直、不可思議中不可思議」とする。後一である無作不可思議は「常境無相常智無縁。以無縁智縁無相境。無相之境相無縁之智。智境冥一而言境智。故名無作也。」（同、下）とあるように、これが能や所の無き不可思議としての理解と言えよう。また、智顗は「絶待止観。亦名不思議止観。亦名無生止観。亦名一大事止観。」（同、二二、中）と、絶待も、不可思議も、無生も、一大事も並列して扱う。絶待について、『法華玄義』は、絶待なるものがあるという理解では「大有所有」（大正三三、六九七、上）ことになるので、「絶言」「絶思」「滅待滅絶」の何らかのこととして待対することのない理解の仕方を「寂滅」絶待と説き、これは「心水澄清」「妙悟之時」の境地であるとする。絶待は、言語や「覚観」によらない理解の仕方であり、何らかのことを追いかけることの無い、待することのない理解の仕方である。絶待について『摩訶止観』では「真慧開発絶此諸待。絶即復絶。如前火木名為絶待。故浄名云。諸法不相待。乃至一念不住故。即此意也。」（大正四六、二二、中）とあるように、絶待は、「真慧開発」すれば、諸待を絶し、絶ということも即ち復た絶し、「火が木を燃やしながら前む、一念不住」のことであるとし、これは絶待なる境地なるものがあるのではなく、常に今であることを表現していると言え、決して待対して理解してはならないことを表現している。絶待としての不可思議は不住であり、不住の文に続いて「即是不思議止観。通於不思議三徳。」（同、下）とあるように、不可思議が不住なのは三徳としてあるからである。三徳は「帰

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

大處」「旨帰」として三徳秘密蔵であり、それを「強名中道。実相。法身。非止非観等。亦復強名一切種智。平等大慧。般若波羅蜜。観等。亦復強名首楞厳定。大涅槃。不可思議解脱。」（同、二一、中）とする。そのあり方が「今明三徳皆不可思議那忽縦。皆不可思議那忽横。皆不可思議那忽一。皆不可思議那忽異。此約理蔵釈。身常智円断具。一切皆是仏法無有優劣。故不縦。三徳相冥同是一法界。出法界外何處更別有法。故不横。能種種建立故不一。同帰第一義故不異。」（同、二三、中）「此三不定三三而論一。一不定一一而論三。不可思議。不並不別伊字天目。」（大正三三、七四一、中）としてあり、三徳秘密蔵のあり方は類通三法や三諦三観三智三惑として、智顗の重要な骨格や旨帰となっている。

三　智顗にとって不可思議とは「妙境」「妙悟」（大正四六、五二、中）「心開意解。豁然得道」「仏旨」（同、五五、上）としての悟りの境地や仏旨であり、故に、「妙名不可思議。」（大正三三、六九七、上）と「妙」を不可思議として理解し、その「妙」は「祇喚妙為絶。絶是妙之異名。」（同、中）の絶待妙と理解する。絶待妙とは、「止止不須説我法妙難思」「是法不可示言辞相寂滅」などの『法華経』の文に依っており（同、六九七、上）、『法華経』の意に依って妙境や仏旨が理解されていると言える。「観不思議境」では「夫一心具十法界。一法界又具十法界百法界。一界具三十種世間。百法界即具三千種世間。此三千在一念心。若無心而已。介爾有心即具三千。」（大正四六、五四、上）「指一為多多非多。指多為一一非少。故名此心為不思議境也。若解一心一切心。一切心一心。非一非一切。一陰一切陰。一切陰一陰。非一非一切。（中略）遍歴一切皆是不可思議境」「不思議三諦」「不可思議一心三観」「不思議三智」「不思議教門」「所照為三諦。所発為三観。観成為三智。教他呼為三語。帰宗呼為三趣。得斯意」（同、五五、上中下）と説かれている。智顗において不思議とは、旨帰や悟りの境地であり、仏旨であるので、智顗にとって一念即三千であろうと、百界千如であろうと、その境地である限り表現上の数の多少は問題とならないので「指一為多多非多。指多為一一非少。故名此心為不思議境也。」と説くのであろう。「此不思議境何法不収。此境発智何智不発。依此境発誓。乃至無法愛。何誓不具何行不満足耶。説時如上次第。行時一心中具一切心云云。」（同、五五、下）とあるように、不思議境に他の九境を具し、不思議境は十重としてあり、故に「一多不一不多不相妨礙。是名行中不思議境。」（同、一〇〇、下）と、一と多の不思議を説く。さらに、煩悩境では「若一念煩悩心起。具十界百法不相妨礙。雖多不有雖一不無。多不積一不散。多不異一不同。多即一一即多。（中略）不受不著。不念不分。（中略）妙慧朗然。以是義故。名不思議。」（同、一〇四、上中）、魔事境では「若即此魔事具十界百法。在一念中。」（同、一一六、中）、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

禅定境では「即知此心是無明法性法界十界百法無量定乱一念具足。」（同、一三一、上）諸見境では「次明不思議境者。一念空見具十法界。即是法性。」（同、一四〇、中）と説かれ、智顗において不可思議は、一念に十界百法を具し、不受、不著、不念、不分別なる妙慧朗然の悟り内容である。しかし、特別な悟りの境地なるものが待対してあるのではなく、「開麁顕妙者。如経我法妙難思。前三皆是仏法。豈有思議之麁。異不思議之妙。無離文字説解脱義。祇体思議即不思議。」（大正三三、七〇〇、中）として、「前三皆是仏法」「祇体思議即不思議」とする。また、十乗観法は「是十種法名大乗観。学是乗者名摩訶衍」（大正四六、一〇〇、上）と、智顗における大乗や摩訶衍の概念も不思議が何を意味しているかということから理解されねばならない。

四　智顗において、「十重観法」（大正四六、五二、中）は「蓋由如来積劫之所勤求。道場之所妙悟。身子之所三請。法譬之所三説。正在茲乎。」として、『法華経』の要となる意であるとする。また、「此大乗観法門具度与彼経（『法華経』）合。故名大乗観也。」（同、一〇〇、中）「是十種観経文（『法華経』）具足。是法不可示言辞相寂滅。諸余衆生類無有能得解。又我法妙難思。即不思議境。於一切衆生中起大慈心。於非菩薩中起大悲心。我得三菩提時。以神通力智慧力引之。令得住是法中。即正発心也。仏自住大乗。如其所得法定慧力荘厳。即是安於二法。自成成他也。破有法王即是破法遍也。又如日月光明能除諸幽暝。斯人行世間。能破衆生闇。即破法遍也。有一導師将導衆人明了心決定在嶮済衆難善知通塞也。浄蔵浄眼。善修三十七品諸波羅蜜。即是両意也。増道損生遊於四方。即是識次位也。安住不動如須弥頂。著如来衣。即安忍也。雖聞是諸声聴之而不著。其意等六根。皆言清浄若此。又云。真浄大法即無法愛也。是十種観散在経文（『法華経』）。而人不知。今撮聚十数入有門為観。乃至三門小異大同。十観入実亦復如是。復次此十観意非但独出今経。大小乗経論備有其意。」（大正三三、七九〇、中下）とあるように、この十乗観法は『法華経』に具足しており、それぞれの名称が直接ある訳ではないが、経文に散在するとして、十乗観法の一つ一つに『法華経』の経文を相当させ、『法華経』を踏まえた上で「復次此十観意非但独出今経。大小乗経論備有其意。」と、十乗観法の表現している意は『法華経』のみならず他の大小乗経論にも読み取ることが出来るとする。ここに智顗の経典観がある。また、観不思議境で説かれる十界互具や一念三千の言わんとしていることも、智顗の読み取った『法華経』の意に依って理解されなければならないのではないだろうか。

〈キーワード〉　不思議、絶待、三徳、十乗観法、『法華経』

（大谷大学大学院修了）

NII-Electronic Library Service